

八重山語小浜方言の韻律特徴と 韻律体系変化のプロセス¹⁾

松 森 晶 子

1. はじめに

本稿は、八重山諸島小浜島の方言（以下「小浜方言」と呼ぶ）の韻律型についての調査報告である。特に本稿は、1990年代に筆者が小浜島において行った2回の調査で得られたデータをもとにして、小浜方言の韻律特徴を記述することを主眼にする。また本稿では、本年（本稿執筆時の2023年）の2月と6月に、2回にわたって行った再調査の際に得られたデータに基づいて、この方言に現在進行中の韻律変化についても報告する。

1990年代に行った調査のデータは大正12年（1923年）生まれの話者から、本年2023年に行った調査のデータは昭和24年（1949年）生まれの話者から得られたものである。本稿では、このほぼ1世代の間に、大きな韻律上の変化がこの小浜方言の体系に生じた（生じつつある）ことを報告する。

松森（2015）は複合語に出現する3種類の韻律型の区別を根拠にして、小浜方言の韻律体系は三型体系であることを論じた。しかしながら複合語のデータだけに基づいて、特定の韻律体系を三型体系であると断定してしまふことはできない。そのためには単純語においても、同様な3種類の型の区別が明瞭に出現することを示す必要がある。そのような目的を掲げ、筆者は今年2月と6月にふたたび小浜島を訪れて調査を実施した。

しかし予想とは異なり現代の小浜方言では、ある特定の条件のもとに、3種類の韻律型のうちの2つ（b型とc型）が合流を遂げていることが明らかになった。このことはすなわち三型体系から二型体系への移行が、現在この方言の体系に進行中であることを示唆している。本稿はこの事実を報告するとともに、なぜ、その3種の韻律型のうちの（一見共通性がないように見える）b型とc型が合流するのか、という点について、問題提起を行う。

2. 小浜島における三型体系の発見とその通時的意義

筆者は2014年6月にも、小浜島をはじめとして黒島、西表島の古見、波照間島などの八重山諸島の調査²⁾を行っている。その調査では、「韻律語」³⁾という韻律単位を初めて導入してデータを収集し、これら八重山諸島の諸方言の韻律体系を分析した。この段階で筆者は、（主として松森2013, 2014などにその結果を公表した宮古諸島の調査経験から）南琉球の諸方言では、韻律語という単位を想定することによって、明瞭な3種類の型の区別の存在を浮き彫りにできるのでは

ないかという見通しに達していた。

またこの段階では、複合語を構成する各語根—すなわちその前部要素と後部要素—が、それぞれ独立した韻律単位（韻律語）を形成することも、経験的に分かっていた。したがって、もし複合語に2モーラ以上の助詞を一つ後続させると、当該の文節⁴⁾には合計3つの韻律語が並ぶことになる。このように3つ（あるいはそれ以上）の韻律語を内部に含む文節では、それより少ない数の韻律語しか含まない文節よりも、より鮮明に3種類の型の区別が出現しやすい。つまり南琉球諸語では特に複合語から開始する文節において、それらの体系内のすべての韻律型の区別が明瞭に出現する確率が高いのでないかと、筆者は予測していた。

そのためこの2014年の八重山諸島の調査では、主として2つの語根から成る複合語に2モーラ以上の助詞を後続させた文を作成してそれを話者に発話してもらい、複合語の前部要素の違いによって3種類の韻律型の区別が出現するか否かを検討した。

この検討の結果、小浜方言の体系にも3種類の型の明瞭な区別が見られることが判明し、それを松森（2015）に報告した。以下はその松森（2015）からの抜粋である。これはhataki「畑」を後部要素とする複合名詞の前部要素の名詞を入れ替えて観察した結果、3種類の明瞭な韻律型の区別が出現することを報告したものである⁵⁾。なお以下本稿を通じて、ピッチの上昇を[という記号で、下降を] という記号で示す。また本稿では、ドット(.)はモーラの切れ目を示すこととする。また、単独でモーラを形成する鼻音の[n]を、本稿では大文字のNで表記することにし、以下のいくつかの引用の一部の表記を変更している。

(1) 小浜方言の韻律体系（松森 2015: 72-73 より一部を抜粋）

[a型]	bi.ra.] N	ha.ta.ki	kara. [du ...	(<small>にら</small> 蒔畑からゾ～)
	a.k.] ko. N	ha.ta.ki	kara. [du ...	(<small>にがうり</small> 芋畑からゾ～)
	gusu]	ha.ta.ki	kara. [du ...	(<small>へちま</small> 唐辛子畑からゾ～)
[b型]	ma.] mi	ha.ta. [ki]	kara. [du ...	(<small>こま</small> 豆畑からゾ～)
	mu.] i	ha.ta. [ki]	kara. [du ...	(<small>こま</small> 麦畑からゾ～)
	gu.] ma	ha.ta. [ki]	kara. [du ...	(<small>こま</small> ゴマ畑からゾ～)
[c型]	sji.N. [zja]	ha.ta.ki	kara. [du ...	(砂糖黍畑からゾ～)
	go.o. [ja]	ha.ta.ki	kara. [du ...	(<small>こま</small> 苦瓜畑からゾ～)
	na.be.e. [ra]	ha.ta.ki	kara. [du ...	(<small>こま</small> へちま畑からゾ～)

これらの3種類の異なる韻律型は、各複合語の前部要素「にら蒔、にがうり芋、へちま唐辛子、こま豆、こま麦、こま胡麻、砂糖黍、にがうり苦瓜、へちま糸瓜」の本来持っている語彙的特徴によって決定していることが、(1)の具体例を見ると分かる。

以上のような方法を採用しながら松森（2015）は、この方言にはa型、b型、c型の3種類の韻律型が存在し（すなわち小浜方言の韻律体系は三型体系であり）、そのa型には「biraN蒔、akkoN芋、gusu唐辛子」、b型には「mami豆、mui麦、guma胡麻」、c型には「sjiNzja砂糖黍、gooja苦瓜、nabeera糸瓜」などの語が所属するという仮説を提示した。

さらに松森（2015）は、この方言の韻律体系で有意義なのはピッチ上昇の位置であるという仮

説も提示し、そのピッチ上昇を「昇り核」の一種と捉えて「 \uparrow 」という記号で示し、次の(2)のような韻律構造を小浜方言のa・b・cの3つの韻律型に提案した。ここでPWとは、「韻律語」のことを示している。

(2) 小浜方言の3種類の型の韻律構造とその解釈 (試案) (松森 2015 から抜粋)

	PW 1		PW 2		PW 3	
[a型]	(bi.ra.N) _{PW}	+	(ha.ta.ki) _{PW}		(ka.ra du) _{PW...}	(芋畑からゾ～)
[b型]	(ma.mi) _{PW}	+	(ha.ta. \uparrow ki) _{PW}		(ka.ra du) _{PW...}	(豆畑からゾ～)
[c型]	(sji.N. \uparrow zja) _{PW}	+	(ha.ta.ki) _{PW}		(ka.ra du) _{PW...}	(砂糖黍畑からゾ～)

この(2)から分かるように松森(2015)は、小浜方言の三型体系のうちのa型は語彙的な指定を受けていない(すなわち一種の「無核」の)型であり、これに対しb型は文節の2つ目の韻律語(この場合は複合語の後部要素のhataki「畑」)の最後の音節に昇り核があり(その音節からピッチが上昇し)、一方c型は、文節の最初の韻律語(すなわちこの場合は、複合語の前部要素)の最後の音節に昇り核があると解釈している。すなわち小浜方言では、文節内に昇り核(ピッチの上昇位置)が指定されているか否か、そして文節内のどこに(何番目の韻律語に)その核が指定されているかが弁別的であると、松森(2015)は提案したのである。

以上の議論の要点をまとめると、次のようになる。

(3) 小浜方言の韻律体系の音韻的解釈 (松森 2015: 73)

- a型：無核(どこにも核の指定がない)
- b型：2つ目の韻律語の末尾音節に昇り核(\uparrow)がある。
- c型：1つ目の韻律語の末尾音節に昇り核(\uparrow)がある。

このように松森(2015)は、a型には無核の(どこにも核を持たない)体系を想定しているのだが、(1)の例を見ると、たとえば a.k] ko. N ha.ta.ki ka.ra. [du... (芋畑からゾ～)、 gu.su] ha.ta.ki ka.ra. [du ... (唐辛子畑からゾ～)のように、a型の語から開始する文節には前から2つ目のモーラ直後にピッチの下降が生じている。しかし松森(2015)は、そのピッチ下降はa型の本来持っている語彙的な特徴ではなく、後から出現した音声的な特徴であるという立場を採っている。これについては3.1節で後述する。

さて(1)に示したような複合語における韻律型の明瞭な違いは、この韻律体系には互いに対立する3つの型(a型・b型・c型)が存在していることを示唆している。しかしながら松森(2015)の解釈(3)は、あくまで複合語のデータをもとに推理して導き出した一つの「仮説」である。セリック・麻生(2023)にも指摘されているように、小浜方言が三型体系であることを証明するためには、単純語においても、(3)に記述したような特徴を持つ3種類の型が存在することを確認する必要がある。すなわち松森(2015)は、今後の調査において検証すべき一つの課題を提示したにすぎなかった。

この課題解決に向けて先鞭をつけたのが、セリック・麻生(2023)の発表である。まずセリック

ク・麻生（2023）では、名詞に1モーラの助詞が後続した場合には次のように2つの型の対立しか出現せず、その結果a型とb型の韻律型は中和してしまうことを示した。

(4) 小浜方言の韻律型（セリック・麻生 2023 の配布資料から抜粋）

- [a型] ma[i]=nu... (米の…) ju[mi]=nu... (嫁の…) fu[tsi]=nu... (口の…)
[b型] fa[ɨ]=nu... (草の…) ma[mi]=nu... (豆の…) ta[ni]=nu... (種の…)
[c型] mai=[nu]... (前の…) nabi=[nu]... (鍋の…) kara=[nu]... (瓦の…)

たとえばa型の「嫁」とb型の「豆」では、ju[mi]=nu... (嫁の…)、ma[mi]=nu... (豆の…)のように、どちらにも語頭から2つ目のモーラ直後にピッチの下降が実現する。その結果、両者には同じような韻律型が出現する。これに対してc型の名詞は、nabi=[nu]... (鍋の…)のように、その名詞から開始する文節の末尾音節（この場合は属格の助詞nuの部分）のみが高く発音されるため、他の2つの韻律型とは明瞭に区別されている。

ところがこの小浜方言のa型とb型は、これらの名詞に奪格の助詞kara「から」や向格のNgee「へ」などを後続させると、異なった韻律型で実現することを、セリック・麻生（2023）は発見・報告した。たとえば奪格の助詞karaを後続させた場合、同じ韻律型で出現していたa型とb型には異なる韻律型が現れる。次の（5）のa型とb型の例を見ると、両者は明らかに異なる韻律型で出現していることが分かる。

(5) a型とb型の違いが出現する環境（セリック・麻生 2023 の配布資料から抜粋）

- [a型] ma[i]=kara... (米から…) fu[tsi]=kara... (口から…) ka[ra]=kara... (川から…)
[b型] mami=ka[ra]... (豆から…) ta[ni]=ka[ra]... (種から…) undi=ka[ra]... (腕から…)
[c型] na[bi]=kara... (鍋から…) nu[bui]=kara... (首から…) ka[ra]=kara... (瓦から…)

a型の名詞から開始する文節では、（4）の場合と同様、語の2モーラ目直後にピッチ下降が実現し、それに後続する助詞karaは全体的に低く付く。これに対してb型の名詞は、低く開始して文節全体にその低いピッチが続いた後に、助詞karaの最後の音節（karaのraの部分）のピッチが急激に上昇する。

すなわち（4）に示したように、名詞に1モーラの助詞を後続させた場合にはa型とb型は中和してしまうのだが、（5）にあるように、名詞に2モーラ以上の助詞を後続させると、両者の韻律型の違いが明瞭に出現することが明らかになったのである。このようにしてセリック・麻生（2023）は、小浜方言の韻律体系は、単純語においても3つの韻律型（a型・b型・c型）の区別が出現する韻律体系であることを実証した。

さらにセリック・麻生・中澤（2023）は、小浜方言におけるこのa・b・cの型の対立は、琉球祖語における韻律型の対立（すなわちA・B・C系列の区別）を保持したものであると論じた。すなわち小浜方言には、複合語においても、単純語においても、琉球祖語に存在した3つの型の韻律型の区別が保たれている⁶⁾可能性が高いことが、これまでの研究で明らかにされたことにな

る。

3. 1990年代に行った2回の調査の記述報告

さて、筆者は1990年代に2回⁷⁾、小浜方言の調査を行って単純語の韻律データを収集している。この1990年代に行った2回の調査の協力者である大正12年（1923年）生まれの小浜方言の話者を、本稿では以下「A氏」と呼ぶこととする。

A氏には、名詞を単独で言い切った場合の韻律型とともに、各名詞に主格の助詞nuを後続させ、さらにその後述語を続ける形式での発話を依頼した。もしこの時点で（奪格のkaraや、向格のNgeeなど）2モーラ以上の助詞を名詞に後続させて調査を行っていたら、3種類の韻律型の区別を認識することができていたかもしれないが、残念ながらこの2回の調査では、2モーラ以上の助詞を後続させた条件での調査は行わなかった。そのためこの方言が3型体系を持つという結論は導き出せていない。

しかしこれら1990年代に行った調査の結果、小浜方言の体系には明瞭な2種類の韻律型の区別が存在することが判明した。それだけでなく、（ごく少数の語においてだが）第3の韻律型（本稿ではこれを「平進型」と呼ぶ。これについては3.2.節において後述する。）と呼ぶべきものも、A氏の発話には観察されることも分かった。

さらにこの1990年代の調査では、その明瞭な2つの韻律型のうちの本稿が「上昇型」と呼ぶ韻律型を持つ語（c型の語がそこに属す）から開始する文節において、2つのH音調の山を持つ、いわゆる「重起伏」が観察される場合があることも明らかになった。

この節では、この1990年代に行った調査におけるA氏の韻律型の観察結果と、それを通じて明らかになった小浜方言の韻律体系の特徴を報告することとする。

3.1. 生産的な2種類の韻律型（下降型と上昇型）の存在

1990年代に筆者が小浜島で行った2回の調査では、各名詞の単独発話のほかに、「～がある」、「～が見られる」のように、主格助詞nuをその後ろに付加して、さらにそれに述語を後続させるような文を作成して発話してもらい、そこに出現する韻律型を観察した。（なお名詞+主格の助詞nuに後続する述語については特に指定はせず、A氏に自由に作成してもらった。）以下、名詞を単独で発話した場合の韻律型を「単独言い切り形」と呼び、「名詞+主格助詞nu+述語」の形式において最初の文節（名詞の開始部分から助詞nuまでの固まり）に出現した韻律型を「助詞付き接続形」と呼ぶこととする。

A氏の韻律型には、主として以下のような2種類のものが見られた。その2種類を、本稿では「下降型」と「上昇型」と仮称する。以下、単独言い切り形と助詞付き接続形との間をスラッシュ（/）で区切って示すこととする。また本稿を通じて、「高い音調」をH音調、「低い音調」をL音調と呼ぶ。

(6) A氏のデータから得られた小浜方言の2種類の韻律型⁸⁾

①下降型：語の頭から最大2モーラ目（1音節語の場合は1モーラ目）の直後に
H音調からL音調へのピッチの急激な下降が出現する。

例：u]tu / utu] nu...（音、音が…） aku]p̄i / aku]p̄i nu...（欠伸、欠伸が…）

②上昇型：文節⁹⁾の最後の音節にH音調（ピッチの急な上昇）が出現する。

例：ka]mi / ka]mi nu...（甕、甕が…） as̄i]ta / as̄i]ta nu...（下駄、下駄が…）

ちなみにA氏の「下降型」には、(3)に挙げたa型とb型の語が属し、「上昇型」には、(3)のc型の語が所属する。この点については、4.2.節で再度触れる。

3.1.1. 下降型の韻律特徴

さて(6)に挙げた2つの韻律型のうちの「下降型」は、その語を持つ文節のピッチが高く開始¹⁰⁾、その文節内部にピッチの急激な下降を持つ。A氏の発話では、そのピッチ下降は、文節の第1モーラ目ないしは第2モーラ目の直後に出現した。次の例がこのことを示している。

(7) A氏の下降型の具体例（名詞に主格の助詞nuを後続させた場合）

1音節語

pa] / pa] nu...（葉、葉が…）

ka] / ka] nu...（井戸、井戸が…）

ki] / ki] nu...（毛、毛が…）

tsi] / tsi] nu...（血、血が…）

ta] / ta] nu...（田、田が…）

a] / a] nu...（粟、粟が…）

pi] / pi] nu...（屁、屁が…）

mi] / mi] nu...（目、目が…）

mi]N / mi]N nu...（耳、耳が…）

2音節2モーラ語

u]s̄i / u]s̄i nu...（牛、牛が…）

s̄a]pa / s̄a]pa nu...（鮫、鮫が…）

i]tsu / i]tsu nu...（魚、魚が…）

u]tu / u]tu nu...（音、音が…）

i]ta / i]ta nu...（板、板が…）

ba]ra / ba]ra nu...（藁、藁が…）

ma]mi / ma]mi nu...（豆、豆が…）

a]mi / a]mi nu...（雨、雨が…）

mu]su / mu]su nu...（筵、筵が…）

2音節3モーラ語

mi]N]tsi / mi]N]tsi nu...（水、水が…）

ju]N]da / ju]N]da nu...（枝、枝が…）

a:]ra / a:]ra nu...（蟻、蟻が…）

ne:]ru / ne:]ru nu...（右、右が…）

u:]ru / u:]ru nu...（瓜、瓜が…）

pi:]tea / pi:]tea nu...（山羊、山羊が…）

jako:] / jako:] nu...（櫛、櫛が…）

a:]ei / a:]ei nu...（汗、汗が…）

na]N]da / na]N]da nu...（涙、涙が…）

u]N]di / u]N]di nu...（腕、腕が…）

ka]jina / ka]jina nu...（肩、肩が…）

3音節以上の語

aku]p̄i / aku]p̄i nu...（欠伸、欠伸が…）

bu]N]duru / bu]N]duru nu...（踊り、踊りが…）

aka]mami / aka]mami nu... (小豆、小豆が…)

たとえば pa:] (葉) や ta:] (田) などの1音節2モーラ語の場合、そのピッチの下降は第1モーラ目直後に出現する。これに対し i]tsu (魚) や ma]mi (豆) などの2音節2モーラの語では、その語の単独言い切り形では、(i]tsu, ma]miのように) そのピッチ下降は第1モーラ直後に実現する¹¹⁾のだが、それに1モーラの主格の助詞 nu を後続させた助詞付き接続形の環境では、itsu] nu ... (魚が…)、mami] nu... (豆が…) のように、その下降位置が語の2モーラ目直後にずれていく。

一方、たとえば ne:]ru (右) のように、2音節語でもそれが3モーラの場合、あるいは aku]pi (欠伸) のような3音節語には、単独言い切り形においても、助詞付き接続形においても、そのピッチ下降は語の第2モーラ目直後に出現する。しかしながらこのピッチの下降位置は、語や文節全体が4モーラ以上の長さになっても、第2モーラ目より後ろにはずれてはいかない。たとえば4モーラ以上の文節 buN]duru / buN]duru nu... (踊り、踊りが…) のピッチの下降位置は、常にその語の2モーラ目直後に固定されていることが分かる。

以上のような観察結果から、A氏の下降型のピッチ下降の位置は、文節全体の長さが2モーラ以下の場合には第1モーラ目直後に出現し、それが3モーラ以上の場合には、原則的に¹²⁾第2モーラ目直後に出現する傾向にあることが分かった。すなわちこの下降型のピッチ下降の位置は、「文節の頭から数えて最大2モーラ目の直後にある」と一般化することができる。本稿ではこのような韻律特徴を、次のような音声規則によって記述しておく。

(8) 小浜方言の文節頭のH音調の挿入

L音調が2モーラ以上連続する文節の最初のモーラにH音調を挿入し、その文節全体の長さが3モーラ以上になった場合には、そのH音調を最大2モーラ目まで拡張せよ。

なおこの(8)は音声的な規則なので、ある特定の韻律型のみには適用するのではなく、条件が整えばどの韻律型にも生じる可能性がある¹³⁾。したがってこれは、(7)に示された下降型だけでなく、後述する上昇型の語から開始する文節にも適用することがある。このことは、本稿の3.4節で後述する小浜方言の重起伏音調の出現とも深くかかわってくる。

3.1.2. 上昇型の韻律特徴

これに対してA氏の発話に観察された「上昇型」では、単独言い切り形でも、助詞付き接続形でも、文節が低く開始してその低いピッチが文節全体に続いた後、その文節の末尾にピッチ上昇(すなわちH音調)が出現する。そしてそのH音調は、常に各文節の最後の音節に出現する。以下がA氏の体系に見られた上昇型の具体例である。

(9) A氏の上昇型の具体例 (名詞に主格の助詞 nu を後続させた場合)

1音節語

[pai / pai [nu... (足、足が…)

2音節2モーラ語

sa[na / sa^hna [nu... (笠、笠が^h…)

ka[mi / ka^hmi [nu... (甕、甕が^h…)

2音節3モーラ語

a[sa / a:sa [nu... (あおさ海苔、あおさ海苔が^h…)

au[ta / au^hta [nu... (蛙、蛙が^h…)

2音節4モーラ語

gaN[zaN / gaN]zaN [nu... (蚊、蚊が^h…)

kaN[kaN / kaN]kaN [nu... (鏡、鏡が^h…)

3音節以上の語

tsi^hpu[ru / tsi^hpu^hru [nu... (頭、頭が^h…)

gusu[ku / gusu^hku [nu... (石垣、石垣が^h…)

itci[ku / itci^hku [nu... (従兄妹、従兄妹が^h…)

ka^hta[na / ka^htana [nu... (刀、刀が^h…)

akatsi[kuN / akatsi^hkuN [nu... (暁、暁が^h…)

このような韻律型の観察結果から、小浜方言の上昇型は「文節全体の長さにかかわらず、その文節の最後の音節が高くなる（H音調になる）」と一般化することができる。なお、この上昇型においてH音調が実現するのは、文節の（最後のモーラではなく）最後の音節であるということは、gaN[zaN（蚊）、ju:[ne:（夕方）、akatsi[kuN（暁）のように、末尾に重音節を持つ語の単独発話を観察・検討すると分かる。この点は、3.3.節で再度検討する。

3.2. 第3の韻律型（平進型）の存在

さてA氏の発話では、前節で述べた2つの韻律型のほかに、（けっして生産的ではなかったが）次のような韻律型も観察された。これは、[waNta, [waNta nu...（豚、豚が^h…）のように、（やや）高い音調で開始し、文節内部のどこにもピッチの急激な上昇や下降が実現しない平坦な韻律型¹⁴⁾である。

A氏の発話に観察されたこの平坦な韻律型は、（少なくとも音声的には）（9）に示した上昇型の韻律型とは大きく異なる。上昇型は、語の単独言い切り形においても、その語に助詞nuを後続させた助詞付き接続形においても、文節全体の最後の音節だけがH音調になる。（9）に示したようにこの上昇型は、名詞の単独言い切り形では、たとえばau[ta（蛙）やakatsi[kuN（暁）のようにその語の語末音節を高くする一方、それらに1モーラ助詞nuを後続させた場合には、auta [nu...（蛙が^h…）、akatsikuN [nu...（暁が^h…）のように、その助詞nuの部分に急激なピッチ上昇が実現する。すなわち上昇型は、各文節の最後の音節だけがH音調となる韻律型であると言える。

これに対しこの第3の韻律型は、このような文節末の急激なピッチ変動を持たず、文節全体を通じて平坦に同じピッチが連続するような特徴を持っている。本稿ではこのような平坦な韻律型を「平進型」と仮称し、それを└waNta, └waNta nu...（豚、豚が^h…）のように、当該の文節の先頭に└という記号を付加して記述することとする。

なお1992年に行った調査では、この平進型を、前節で述べた他の2つの型（下降型と上昇型）と比較するため、A氏に依頼して下降型、上昇型、平進型の代表的な語を、同じ文の中に入れて発話してもらった。その結果次のように、（少なくとも音声的には）明瞭に異なる3種類の韻律

型が実現した。

(10) 小浜方言の3種類の韻律

下降型	a:]ra wa	[ku]raicita	(蟻を殺した。)
上昇型	garaci [wa	ku]raicita	(烏を殺した。)
平進型	↓waNta wa	ku]raicita	(豚を殺した。)

しかしながら1990年代に行った2回の調査のデータ分析においては、この韻律型(平進型)を、音韻的な型の一つとは認めなかった。A氏の発話から得られたこの「平進型」が出現する語例は次のようなものだったが、下降型や平進型に比べると、その出現数は圧倒的に少なかったからである。

(11) 平進型で出現する語彙

↓usagi / ↓usagi nu... (兎、兎が…)、 ↓ujaNtcu / ↓ujaNtcu nu... (鼠、鼠が…)、
↓waNta / ↓waNta nu... (豚、豚が…)

したがって1990年代の調査では、A氏の発話データの少数の語に観察されたこの非生産的な韻律型を、上昇型の音声的な変異の一つであると解釈した。つまりこの平進型は、上昇型の一変種であると(その時点で)筆者は見做したのである。その結果、小浜方言の韻律体系は(6)に示した2種類の韻律型(下降型と上昇型)から成り立ち、上昇型には(11)にあるような一種の「異音調」が観察されることがあるというのが、この1990年代の2回の調査において、筆者が最終的に出した結論であった¹⁵⁾。

3.3. 下降型と上昇型の韻律単位の違い

さて、3.1.節で述べた小浜方言の2種類の韻律型は、そのプロミネンス位置の算出に関わる韻律単位に違いがある。下降型のほうは、語の頭から最大2モーラ目直後にピッチの急激な下降が実現するのに対して、上昇型のほうは、文節の最後の音節が急激なピッチ上昇を伴って実現するからである。このように小浜方言では、下降型のピッチの下降位置はモーラを韻律単位として算出されるのに対して、上昇型のピッチの上昇位置は音節を韻律単位として導き出される¹⁶⁾。

下降型のピッチ下降の位置が、「語の頭から数えて最大2モーラ目の直後」のように「モーラ」を単位として決定されていることは、A氏の発話の中から3モーラ以上の単純語で、かつ語頭に重音節を持つような語¹⁷⁾を抜き出して検討することによって理解できる。

(12) 下降型の下降位置を示す具体例

a:]ra ~ a:]ra / a:]ra nu... (蟻、蟻が…)	u:]ru ~ u:] ru / u:]ru nu... (瓜、瓜が…)
juN]da / juN]da nu... (枝、枝が…)	kaN]dzi / kaN]dzi nu... (風、風が…)
piN]gu / piN]gu nu... (煤、煤が…)	suN]di / suN]di nu... (袖、袖が…)
tuN]tsi / tuN]tsi nu... (妻、妻が…)	no:]ru / no:]ru nu... (海苔、海苔が…)

piN]tsi / piN]tsi nu... (肘、肘が…) gi:]ba: / gi:]ba: nu... (牙、牙が…)
 juN]daru / juN]daru nu... (涎、涎が…) kuN]gani / kuN]gani nu... (黄金、黄金が…)
 buN]duru / buN]duru nu... (踊り、踊りが…)
 uN]di / uN]di nu... (腕、腕が…) piN]da / piN]da nu... (渚、渚が…)
 naN]da / naN]da nu... (涙、涙が…) aN]za: / aN]za: nu... (黒子、黒子が…)
 piN]daru / piN]daru nu... (左、左が…) miN]duN / miN]duN nu... (女、女が…)

もし音節で数えてそのピッチ下降の位置が決定しているとなれば、これらの語はたとえば *juNda]ru / *juNda]ru nu... (涎、涎が…)、*piNda]ru / *piNda]ru nu... (左、左が…) のような韻律型となるはずである。実際にはそのようなにはなっていないことから見て、下降型のピッチの下降位置は、音節ではなく、モーラによって算出されていることが分かる。

下降型の下降位置がモーラを単位として決定していることは、次のような語の下降位置を検討しても分かる。A氏の下降型の中から、3モーラ以上の単純語で、かつ2モーラ目が重音節の一部となっている語を抜き出して検討してみると、そこには次のような韻律型が観察された。

(13) 下降型の下降位置を示す具体例

jako]: / jako]: nu... (櫂、櫂が…) kã]tsu:] / kã]tsu:] nu... (鯉、鯉が…)
 kama]Ndu / kama]Ndu nu... (竈、竈が…) fũ]ka]Nta / fũ]ka]Nta nu... (外、外が…)
 biki]NduN / biki]NduN nu... (男、男が…)

もし音節で数えてそのピッチ下降の位置が導き出されているとなれば、これらの語には、たとえば *jako:] nu (櫂が…)、*kã]tsu:] nu (鯉が…)、*kama]Ndu (竈)、*fũ]ka]Nta (外)、*biki]NduN (男) のような韻律型が出現するはずであるが、そのようなにはなっていない。このことから見ても、下降型の下降位置はモーラによって算出され、決定されていると判断される。

これに対し、上昇型の文節末尾に実現するピッチ上昇の位置は、モーラではなく「音節」を単位として決まっている。これは(軽音節ではなく)重音節で終わる単純語の韻律型を検討することによって判断できる¹⁸⁾。A氏の発話データの中から、重音節で終わる上昇型の単純語の韻律型を観察してみると、次のように、その最後の音節全体のピッチが高く実現していることが分かる¹⁹⁾。

(14) 上昇型の上昇位置を示す具体例

[saN (風) [ma: (孫) [dzi: (土地) [kai (影) [sai (白髪) [nuN (蚤) [so: (竿) [pai (足)
 ju:]ne: (夕方) i]rak[kjo: (辣韭) ti]N]tso: (天井) u]ne: (鰻) sa]ko: (咳) aN]ka: (锚)
 sũ]ta: (砂糖) sũ]rai (皿) u]bui (稗) jaM]mai (病) gaN]zaN (蚊) akatsi]kuN (暁)
 gu]saN (杖) ku]joN (曆) hã]tsaN (鋏) kaN]kaN (鏡) tsũ]tsuN (包み) sã]puN (石鹼)

たとえば sa]ko: (咳)、u]bui (稗)、jaM]mai (病)、akatsi]kuN (暁) のように、これらの語は、すべて最後の音節全体がH音調になっている。もし上昇型のピッチ上昇が最後のモーラに実現す

ると仮定するならば、これらの語には^xsako: (咳)、^xubu:ji (稗)、^xjaMma:ji (病)、^xakatsiku[N (暁) のような韻律型が出現するはずである。しかし実際にはそうになっていないことから見て、この上昇型のピッチの上昇位置はモーラではなく、音節によって算出され、決定していることが分かる²⁰⁾。

このように、小浜方言の下降型と上昇型とは、そのピッチ変動の位置を算出するための韻律単位が異なる。下降型のピッチの下降位置はモーラを韻律単位としているのに対して、上昇型のピッチの上昇位置は音節を韻律単位として導き出されている。

3.4. 上昇型における重起伏音調の出現

A氏の発話において特に目立った韻律上の特徴は、上昇型の語から開始する文節の内部に2つの高い音調を持つ「重起伏」の音調が観察されることがあった点である。前述のように高い音調をH音調、低い音調をL音調とすると、この重起伏はHLHのように、文節内部にH音調を2つ持つ韻律型ということになる。

以下がその重起伏を持つ上昇型の語の具体例だが、この重起伏は主格の助詞 nu が後続した助詞付き接続形のほうに特に顕著に出現したため、(15)にはその助詞付き接続形を示すことにする。これらはすべて文節の最後の音節（すなわちこの場合は助詞 nu の部分）全体がH音調になっているが、このことから見て、これらはすべて上昇型の語であることが分かる。

(15) 上昇型に類出した重起伏音調

kaji [nu... (影が^s…) pi]ra [nu... (筥が^s…) ju]ru [nu... (夜が^s…) bu]s̄i [nu... (節が^s…) gusa]N [nu... (杖が^s…) kuljo]N [nu... (暦が^s…) ka]Ndu [nu... (角が^s…) ta]:ra [nu... (俵が^s…) ka]:ra [nu... (瓦が^s…) po]:k̄i [nu... (箒が^s…) pjo]:tu [nu... (海豚が^s…) ta]jiku [nu... (太鼓が^s…) a]uta [nu... (蛙が^s…) a]buru [nu... (扇が^s…) ka]Nna [nu... (鉦が^s…) ha]Ndaka [nu... (裸が^s…) a]Nka: [nu... (錨が^s…) ga]N]zaN [nu... (蚊が^s…) kaN]kaN [nu... (鏡が^s…) maN]dz̄u: [nu... (バパイヤが^s…) suN]zuru [nu... (硯が^s…) suN]zuru [nu... (水雲が^s…) tiN]cjoo [nu... (天井が^s…) jaM]mai [nu... (病が^s…) sutu]Ndi [nu... (朝が^s…) nabe]:ra [nu... (糸瓜が^s…) kaN]naru [nu (雷が^s…) mako]:Nza [nu... (百足が^s…) mumu]Ndaru [nu... (腿が^s…) mi]:maNts̄i [nu... (蚯蚓が^s…) i]rakkjo: [nu... (辣韭が^s…)

これらの文節には、内部にH音調を2つ持つ（HLHのような）重起伏の韻律型が出現していることが見て取れる²¹⁾。

通時的にはこれらの重起伏の音調は、もともと文節の最後の音節だけがH音調だった上昇型の文節の頭に、語頭隆起によってH音調が生じた（すなわちLLH>HLHのような韻律変化を経た）ことによって、新たに出てきたものと見てよいだろう。その文節の頭に新たに生じたH音調は、すでに本稿の(8)に記述した文節頭のH音調の挿入という音声規則によって出現した²²⁾と考えられる。

このように1990年代に行った調査で得られたA氏のデータの中には、上昇型の語から開始す

る文節に重起伏の音調が少なからず観察されるという特徴が見られた²³⁾。

3.5. 指小音調（パラ言語情報を表す特殊な韻律型の存在）

さて、小浜方言の韻律特徴の中でもとりわけ注目に値すると思われるのが、指小辞 *-ma* や *-N* が付加した場合に出現する特殊な韻律型の存在である。これは日琉語の中にあまり類を見ない（少なくとも従来あまり報告がない）韻律特徴の一つではないかと考えられる。

多くの日琉語の方言には、名詞に「小さい、かわいい、身近な、親近感が湧く」というような情緒的意味を添える際に指小辞が添加されることがある。小浜方言でも、たとえば *туру*（鳥）→ *tura:ma*（鶏）、*juNda*（枝）→ *juNdaN*（小枝）のように、*-ma* や *-N* という指小辞を名詞の後に付加することによって、そのようなパラ言語情報が伝達される。

この小浜方言の特に興味深い点は、その指小辞が添加することに伴って、通常のH音調よりもピッチの高い「超H音調 (Extra-high tone)」と呼ぶべき音調が、新たに出現することにある。（この特徴はA氏の発話だけでなく、第4節で後述するB氏の発話の中にも顕著に見られた。）またこのように超H音調から開始する韻律型は、当該の語の内部でピッチが中くらいの高さにまで下降する。以下本稿では、超H音調が出現する音節の前に小さい上向き矢印（↑）を付け、さらに中程度の下降を示すのに下向き矢印（↓）を付けて示す²⁴⁾こととする。そうすると、たとえば *fa:*（子供）、*туру*（鳥）、*juNda*（枝）という語にこれらの指小辞が付加すると、**fa:↓ma*（子供・幼児）、**tura↓:ma*（鶏）、**juN↓daN*（小枝）のような韻律型が発生する。

以上のような特徴を持つ韻律型を、本稿では以下「指小音調」という仮称で呼ぶことにしたい。たとえば *si̯pi̯sa:*（葱）という語に指小辞の *-ma* や *-N* を付加すると、**si̯pi̯↓samma*、あるいは **si̯pi̯↓sa:N*（小葱）のように、指小音調が出現する。そうすると、通常の「葱」に対して「島葱（通常の葱よりサイズが小さい）」というような意味に変化する。（この情報は、本稿の第4節でその韻律特徴を記述・報告するB氏から得られたものである。）

以下には、A氏から得られたデータとともに、2014年6月に調査をした際に2名の話者から得られたデータ、および本稿の第4節で紹介する話者（B氏）から得られたデータの中から、この指小音調を持つ語を挙げたものである。

(16) 小浜方言において指小音調が出現する語²⁵⁾

**tura↓:ma*（鶏） **pu̯tso↓:ma*（臍） **juNda↓N*（枝） **fa:↓ma*（子供・幼児）
aNza↓:ma*（黒子） **bira↓:ma*～bira↓:N*（韭） **tea:↓ma*（乳房） **ko:↓ma*（卵）
*ko: *funa↓bo:N*（シークァーサー・ひらみレモン）

先述のように、A氏の「下降型」には原則的にa型とb型の語が対応し、「上昇型」にはc型の語が対応する。この観点から（16）に挙げられた具体例を検討してみると、この指小音調は、下降型に属するもの（最終的にa型、あるいはb型であると分かった語）に多く出現しているように見える。A氏の発話の中から上昇型に所属する語（すなわちc型と判断された語）でこの指小音調を伴って出現する例を探したが、*funabu*（蜜柑）に指小辞 *-N* を付加してできた *ko: *funa↓bo:N*（シークァーサー）²⁶⁾しか発見できなかった。

一方、今年（本稿執筆時の2023年）に調査したB氏（第4節で紹介する）の発話データの中には、次のような例があった。

(17) 小浜方言において指小音調が出現する語（B氏から得られたデータに基づく）

↑nama↓N（草の一種） ↑miNgu↓roN（キクラゲ）

これらは、指小辞の -N を付加する前の語根が、c型に属する（すなわち小浜島では上昇型で出現する）ものである可能性が高い²⁷⁾。もし、上昇調の語に同様な指小辞が付いた際にも（16）の例とまったく同じような韻律特徴が出現するとすれば、これらの指小音調を伴って出現する語彙は、小浜島のa・b・cの韻律型に属す語彙とは独立した語のグループと見做さなければならないだろう²⁸⁾。この点については、さらなる調査によってデータを集めて、より詳細に検討する必要がある。

3.6. B系列の語に見られるc型化の傾向について

第2節で述べたようにセリック・麻生・中澤（2023）は、小浜方言におけるa・b・cの3つの型の対立は、琉球祖語における3種類の韻律型の区別（すなわちA・B・C系列の区別）を現代に継承したものであるとした。ところがその一方でセリック・麻生・中澤（2023）は、B系列の一部の名詞（「色」、「花」、「鏡」など）が、小浜方言では（期待されるb型ではなく）c型の韻律型で出現していることも指摘している。このことは、現代の小浜方言では、すでにb型とc型とが合流し始めていることを示唆している。

このセリック・麻生・中澤（2023）によって指摘されたような観点から、本節で報告している大正12年生まれのア氏の発話データを改めて検討してみると、確かにその指摘の通り、（下降型で出現することが期待される）B系列の語の一部が、上昇型（c型の韻律型）で出現していることが判明した。次のような語群がそれに該当する。ここでは、各語が上昇型に属すことを判別しやすくするため、単独言い切り形ではなく、あえて（主格の助詞のnuを後続させた）助詞付き接続形のほうを挙げている。

(18) 小浜島において下降型（b型）が期待されるのに上昇型（c型）で出現した語群

ja: [nu...（家が…）] dzi: [nu...（土地が…）] so: [nu...（竿が…）] uja [nu...（親が…）]
 pai [nu...（南が…）] iru [nu...（色が…）] paŋa [nu...～ haŋa [nu...（花が…）]
 duku [nu...（毒が…）] atsa: [nu...（明日が…）] fuṭsɨ [nu...（櫛が…）]
 kaN]du [nu...（角が…）] nutsɨ [nu...（命が…）] kaN]kaN [nu...（鏡が…）]
 kaN]na [nu...（鉋が…）] kaN]naru [nu...（雷が…）] nabe]ra [nu...（糸瓜が…）]

これらの語は、「系列別語彙」の観点から見るとB系列の候補語となる²⁹⁾。そのためこれらは主格の助詞のnuを後続させた場合に、（b型の多くの語が所属する）下降型のほうで出現することが期待される。それにもかかわらずA氏の発話では、これらは（c型の語が所属する）上昇型で出現していることが判明したのである。

このように、A氏から得られたデータの中にも、下降型（b型の韻律型）で出現することが期待される語の一部が、下降型ではなく上昇型（c型の韻律型）で出現していることが、明らかになった。

またセリック・麻生（2023）には、小浜方言では、b型とc型の揺れが見られる名詞（「麦」「家」など）も存在することが指摘されている。筆者の調査したA氏の発話データの中にも、2種類の韻律型を持つ例が見つかった。次の語群³⁰がそれであるが、これらにも、下降型と上昇型の2種類の韻律型の出現が確認された。

(19) 小浜島において下降型（b型）が期待されるのに上昇型（c型）も出現した語群³¹

jaN]du nu... / jaNdu [nu...（戸が…） nuka] nu... / nuka [nu...（糠が…）
jama] nu... / jama [nu...（山が…） mako]:ra nu... / ma]ko:ra [nu...（枕が…）

これらの語も、すべてB系列の候補語となっているものである。

このようにA氏の韻律体系において、下降型で出現することが期待される一部の語の韻律型が、c型の語の示すべき韻律型（上昇型）で出現する傾向が見られたのだが、このことは大正12年生まれの小浜方言話者A氏の韻律体系においても、b型とc型の合流のプロセスがすでに開始していたことを意味している。

4. 2023年（令和5年）に実施した調査の報告

さてこの節では、本年（本稿執筆時の令和5年（2023年））の2月と6月に筆者が小浜島において行った調査の結果を報告する。この2回の調査に協力いただいた話者は、昭和24年（1949年）生まれの男性である。この話者を、以下本稿では「B氏」と呼ぶこととする。

B氏の体系では、語の単独発話の場合にも、それに1モーラ助詞を付けた場合にも、b型とc型の語の韻律型が合流を遂げていた。すなわち、（少なくとも今回調査できた語彙に関しては）b型で出現することが期待されるほぼすべて³²の語が、c型の語の示す韻律型と同じような型で出現したのである。

しかもその2つの型が合流して出現する韻律型は、3.2.節で「第3の韻律型」として紹介した平進型だった。これは今回の調査結果の中でも特筆すべき点である。

4.1. B氏の2種類の韻律型（下降型と平進型）

本年（令和5年、すなわち2023年）2月に実施した調査では、まず2モーラの単純語「空 tiN、口 fʊtsʲ、井戸 ka、洞窟 abo、腹 bata、山 jama、味噌 misu、耳 miN、舟 fʊni、鍋 nabi、臼 usʲ、門 zo:」などを用いて、そこに3種類の型の明瞭な区別が出現するかを検討した。そのうち「空 tiN、口 fʊtsʲ、井戸 ka、洞窟 abo」はa型の、「腹 bata、山 jama、味噌 misu、耳 miN」はb型の、「舟 fʊni、鍋 nabi、臼 usʲ、門 zo:」はc型の候補語である。

特にb型の名詞から開始し、奪格のkaraや向格のNgeeのような2音節以上の助詞をその名詞に後続させた文節において、jama ka[ra（山から）、jama N[gee（山へ）のようにその助詞部分（す

なわち文節の2つ目の韻律語)の最後の音節に、H音調が観察されることを期待した。しかしながらそのような文節末のピッチ上昇は、今回調査したB氏の発話では観察されることはなかった。

まず名詞に奪格のkaraを後続させた場合には、b型の名詞から開始する文節では、たとえばbata ka|ra (腹から)、jama ka|ra (山から)のように、その3つ目のモーラ直後にピッチがやや下がって聞こえるような韻律型が観察された。一方a型の名詞から開始する文節にも、似たような韻律型が観察された(tiN ka|ra 空から、fu|tsi| ka|ra 口から)。このためこの条件下では、a型の示す韻律型とb型の示す韻律型との区別がつかない。

これに対してc型の名詞から開始する文節においては、karaを後続させた場合にはfu[ni] kara (舟から)、na[bi] kara (鍋から)のように、当該の名詞部分の末尾音節にH音調が出現した。したがってこの条件ではab対cの型の対立が観察されると見てよいと思われる。

一方、向格のNgeeを接続させた場合にはb型の名詞から開始する文節には、bata] N[gee (腹へ)、jama] N[gee (山へ)のように、その最後の音節が上昇する場合もあったが、このような文節末のピッチ上昇は、常に安定して出現するとは限らなかった。これに対してc型の名詞から開始する文節においては、fu[niN] gee (舟へ)、na[biN] gee (鍋へ)のように、文節の最初の韻律語(すなわち名詞+NgeeのNの部分)の末尾音節にH音調が出現した。一方、この条件下では、a型のほうもfu|tsi| Ngee ~fu|tsi| N] gee (口へ)のように、そのピッチの下降位置が2つ目と3つ目の間で揺れるため、c型の韻律型と同じ位置でピッチの下降が実現するように感じられる。このため、a型とc型の韻律型の区別をはっきりと聞き取ることは困難であった。

以上のように、今回の調査ではさまざまな条件で上述の2モーラ名詞の型の区別が聞き取れるかを試したが、最終的に3種類の韻律型の区別を明瞭に聞き取れるような条件を見出すことはできなかった。B氏の韻律体系は三型体系である可能性が高いため、引き続き2モーラ以上の助詞を名詞に後続させた条件で、調査を継続する必要がある。

さて、以上のような特徴を持つB氏の発話の中で、韻律型の区別が特に明瞭に出現したのは、「～の中... nu naka」、「～の家(小屋) ... nu ja:」、「～の形... nu katatsi」のように名詞に属格の助詞nuを後続させ、さらにその後ろに名詞を後続させた環境であることが、2月の調査の段階で明らかになった。この条件のもとでは、2種類の型は明瞭に観察できる。

そこで本年6月の2回目の調査では、A氏から得られたデータ中の名詞を、「～の話... nu hanasi」³³⁾という句の～の部分に入れて発話してもらおうよう、B氏に依頼した。さらに当該の名詞の開始部分のピッチの高さ(高く開始するか、やや低めに開始するか)をより観察しやすくするために、各名詞の前に「unu その」を付け、「その～の話unu ... nu hanasi」という句の中に入れて発話してもらった。このような条件のもとではb型とc型が、a型とは明瞭に異なる韻律型で出現した。それを例示したのが、次の(20)である。

(20) B氏から得られた小浜方言の韻律型

[a型] u]nu [gusu] nu [hana]si (その唐辛子の話)	u]nu [ako]:N nu [hana]si (その芋の話)
[b型] u]nu mami nu hana]si (その豆の話)	u]nu mui nu hana]si (その麦の話)
[c型] u]nu ciNdza nu hana]si (その砂糖黍の話)	u]nu go:ja nu hana]si (その苦瓜の話)

この(20)の例からも明らかなように、B氏の発話では、b型とc型の単純名詞から開始する文節は両者とも平進型になる。この韻律型は3.2.節で「第3の韻律型」として紹介した韻律型である。前述のようにA氏の体系では、この韻律型は非常に限られたごく少数の語彙にしか出現しない非生産的な韻律型であった。これに対してB氏の体系では、この平進型は、c型のみならずb型の示す韻律型として一般的なものであり、すなわち非常に生産的な韻律型だったのである。

その結果、B氏の韻律体系には、名詞に属格助詞 nu を後続させた場合に、下降型と平進型という、明瞭に区別される2つの韻律型の対立が存在することが明らかになった。このような条件のもとでB氏の発話に観察された2つの韻律型の特徴は、以下の(21)に示す通りである。なお本稿では、「その～の話」という句の unu (その) と hanasj (話) の部分を省略し、両者とも ... によって示すこととする。

(21) B氏のデータから得られた小浜方言の2種類の韻律型

①下降型：語の頭から最大2 モーラ目（1音節語の場合は1モーラ目）の直後に

H音調からL音調へのピッチの急激な下降が見られる。

例：...utu] nu... (…音の…) ...aku]p̄j nu... (…欠伸の…)

②平進型：(「その」以降の) 文節全体に急激なピッチ変動が見られず、全体に平坦なピッチが続く。

例：... 卜 mami nu ... (…豆の…) ... 卜 kaNkaN nu ... (…鏡の…)

4.2. B氏の各韻律型の所属語彙とA氏のそれとの比較

このB氏の下降型のピッチ下降の位置は、(7)に例を挙げたA氏の下降型の場合と同様、「文節全体の長さが2モーラ以下の場合には第1モーラ目直後に出現し、それが3モーラ以上の場合には第2モーラ目直後にずれる傾向にある」と一般化できる。以下は、そのB氏の韻律体系に見られた下降型の具体例である。

(22) B氏の下降型の具体例（名詞に属格の助詞 nu を後続させた場合）

1音節語

... pa]: nu ... (…葉の…) ... ka]: nu ... (…井戸の…)

... ki]: nu ... (…毛の…) ... tsi]: nu... (…血の…)

2音節2モーラ語

... u]s̄j nu ... (…牛の…) ... s̄a]pa nu ... (…鮫の…)

... i]tsu nu ... (…魚の…) ... u]tu nu ... (…音の…)

2音節3モーラ語

... miN]ts̄j nu ... (…水の…)

... juN]da nu ... (…枝の…) ... a:]ra nu (…蟻の…)

... ne:]ru nu ... (…右の…) ... pi:]t̄ca nu ... (…山羊の…)

... u:]ru nu ... (…瓜の…) ... j̄ako]: nu ... (…櫛の…)

3 音節以上の語

- ... akɯlpj̄ nu... (…欠伸の…)
 ... buNj̄duru nu ... (…踊りの…)
 ... aka]mami nu ... (…小豆の…)

一方、B氏の韻律体系に見られた平進型は、文節内部のどこにもピッチの急激な上昇や下降が実現せず、全体を通じて平坦なピッチが続くような韻律型である。その具体例は、以下に示す通りである。

(23) B氏の平進型の具体例 (名詞に属格の助詞 nu を後続させた場合)

1 音節語

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| ... ʈ ta: nu ... (…田の…) | ... ʈ a: nu ... (…粟の…) |
| ... ʈ pi: nu ... (…屁の…) | ... ʈ mi: nu ... (…目の…) |
| ... ʈ miN nu ... (…耳の…) | ... ʈ pai nu ... (…足の…) |

2 音節 2 モーラ語

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| ... ʈ ita nu ... (…板の…) | ... ʈ bara nu ... (…藁の…) |
| ... ʈ mami nu ... (…豆の…) | ... ʈ ami nu ... (…雨の…) |
| ... ʈ musu nu ... (…筵の…) | ... ʈ saŋa nu ... (…笠の…) |
| ... ʈ kaŋi nu ... (…甕の…) | |

2 音節 3 モーラ語

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| ... ʈ a:ci nu ... (…汗の…) | ... ʈ naNda nu ... (…涙の…) |
| ... ʈ uNdi nu ... (…腕の…) | ... ʈ a:sa nu ... (…あおさ海苔の…) |

2 音節 4 モーラ語

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| ... ʈ kaina: nu ... (…肩の…) | ... ʈ auta: nu ... (…蛙の…) |
| ... ʈ gaNzaN nu ... (…蚊の…) | ... ʈ kaNkaN nu ... (…鏡の…) |

3 音節以上の語

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| ... ʈ tsj̄puru nu ... (…頭の…) | ... ʈ gusuku nu ... (…石垣の…) |
| ... ʈ it̄ci ku nu ... (…従兄妹の…) | ... ʈ kaŋana nu ... (…刀の…) |
| ... ʈ aburu nu ... (…扇の…) | ... ʈ kaNnaru nu ... (…雷の…) |
| ... ʈ akatsikuN nu ... (…暁の…) | |

さて、このB氏の下降型の具体例 (22) と平進型の具体例 (23) のそれぞれに所属する語彙を、すでに (7) と (9) で示したA氏の下降型と上昇型の具体例のそれぞれの語彙と比較してみると、そこには型の対応の規則的な「ずれ」が見られることが分かる。すなわちA氏の体系では下降型に所属している一部の語彙が、B氏の体系では平進型に所属しているのである。

たとえば1音節語の「田 ta:、粟 a:、屁 pi:、目 mi:、耳 miN」、2音節 2 モーラ語の「板 ita、藁 bara、豆 mami、雨 ami、筵 musu」、2音節 3・4 モーラ語の「汗 a:ci、涙 naNda、腕 uNdi、肩 kaina:」は、A氏の体系では下降型で出現しているのに対して、B氏の体系では(下降型ではなく)

平進型で出現している。

すなわち、話者が1990年代に行った調査で調べた大正12年生まれの話者の韻律体系と、今年(2023年)に調査した昭和24年生まれの話者の韻律体系とは、名詞の単独言い切り形、およびそれに1モーラの助詞を後続させた助詞付き接続形において、どちらにも2種類の型が観察されたのだが、それぞれの韻律型の所属語彙には、このような対応関係の規則的な「ずれ」が見られることが明らかになった。

このことは、この2人の小浜方言の話者から得られた韻律データを突き合わせて検討すれば、小浜方言の三型体系に存在していた3種類の韻律型(a型・b型・c型)のそれぞれに所属していた語彙を推定できることを示唆している。A氏の「下降型」には(3)に挙げたa型とb型の語が属し、「上昇型」にはc型の語が所属する。それに対してB氏の「下降型」には(3)に挙げたa型の語だけが所属し、「平進型」のほうにb型とc型の語が所属すると推定されるからである³⁴⁾。

制限ページ数を超過してしまうため、本稿ではその3種類の韻律型のそれぞれに所属する語彙のリストを載せることができない。これは、稿をあらためて公開したい。

5. 問題提起— b型とc型の合流過程とその結果について

以上述べてきたように、2023年に筆者が調査した昭和24年生まれの話者の韻律体系では、少なくとも名詞の単独言い切り形、およびそれに1モーラの助詞を後続させた環境で、完全にb型とc型とが合流を遂げていた。そのため現代の小浜方言では、a対bcの韻律型の対立が、ほぼ確立しつつある状況にあると言えるだろう。

では一体なぜb型は、a型とではなく、c型と合流を遂げてしまったのだろうか。小浜島の韻律体系の変化については、このような視点からの問題提起が成される必要があるだろう。

セリック・麻生(2023)から抜粋した(4)や(5)の例を検討する限り、どちらの例においても、b型とc型は明確に異なる韻律型で出現している。

まずそのうちの(4)の例を見ると、名詞に1モーラの助詞を後続させた環境では、b型の韻律型は(c型ではなく)a型のそれと中和している(a型ju[mi]=nu... 嫁の…、b型ma[mi]=nu... 豆の…)。それにも関わらずb型は、なぜかa型とは合流を遂げなかった、ということになる。

次に(5)の例を見ると、b型とc型は文節のどこかでピッチの急激な上昇を伴うという共通点を持つものの、そのピッチ上昇の位置は、互いに大きく異なる(b型mami=ka[ra... 豆から…、c型na[bi]=kara... 鍋から…)。それにも関わらずこの2つの韻律型(b型とc型)は、現在合流を遂げつつあるのである。

さらに注目すべきなのは、(4)や(5)の例から分かるように、b型とc型の語から開始する文節には両者ともその内部にピッチの「上昇」が出現するのだが、それにも関わらず、両者が合流した結果生じたあらたな韻律型は「上昇型」ではないという事実である。本稿で報告したように、それは平進型、すなわち文節全体を通じてピッチの急激な変動(下降や上昇)が観察されないような平坦な韻律型なのである。

以上のような小浜方言における大きな韻律上の変化は、いったいどのようなプロセスを経て生

じたのだろうか。今後、この韻律体系に現在起こっている韻律変化を理解・説明するためには、諸方言の韻律変化の一般的傾向を考慮しながら（すなわち類型的に見てどのような韻律上の変化が生じやすいのか、というような視点を導入しながら）臨む必要があると思われる。

私見では、このような合流の原因は何かについて考えるためのヒントは、上述のような大きな韻律変化がこの方言に生じる前の韻律体系内部に存在すると考えられる。たとえば本稿の第3節ですで見えてきたように、大正12年生まれのア氏の発話においては、依然としてb型とc型の区別ははっきりと保たれている³⁵⁾。今後は、このような特徴を依然として保持している小浜方言話者の韻律体系に焦点を当てて、その体系内に存在する各韻律型の特徴を詳細に観察・記述する必要があるだろう。そのことによって、本節で提起したような問題に答えるための手がかりが、将来得られるのではないかと予想される。

6. 結語

以上本稿では、小浜方言の韻律体系についての筆者のこれまでの調査の結果を報告してきた。特に本稿は、1990年代に行った2回の調査の話者から得られたデータに基づいて、小浜方言の韻律型の特徴についての記述・報告を行った。

また本稿は、本年（本稿執筆時の2023年）の2月と6月に、2回にわたって行った再調査の際に得られたデータをもとにして、三型体系から二型体系への移行が現在この小浜方言の体系に進行中であることを報告した。

現代の小浜方言では、名詞の単独言い切り形や、それに1モーラ助詞を後続させた環境で、(かつて明瞭に区別が保たれていた) a・b・cの3種類の韻律型のうちのb型とc型の区別が失われつつある。そしてその結果、b型とc型は、両者とも平進型で出現している。このことを、本稿では記述・報告した。

以上のような事実を報告するとともに本稿では、このような変化がなぜ生じたのかについての問題提起を行った。すなわち、①いったいなぜ（共通性が少ないように見える）b型とc型とが合流するような変化がこの小浜方言に生じたのか、②その合流の結果、なぜ（上昇型ではなく）文節全体を通じてピッチの急激な下降や上昇が観察されない平坦な韻律型（平進型）へと、両者は変化を遂げてしまったのか。以上の2点について、本稿は問題提起を行った。

注

- 1) 本稿はJSPS科研費18K00588、19H00530、および国立国語研究所共同プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」の研究成果の一部である。
- 2) この調査は、2014年6月に行われた。小浜島の方言話者はT氏（昭和5年生まれ、男性）とK氏（昭和6年生まれ、女性）である。
- 3) 「韻律語」とは、音節やフットより大きい韻律単位であり、形態素情報をもとに形成される韻律上の単位である。南琉球諸語の韻律語は「2モーラ以上の語根・助詞（接語）によって形成される」と定義されており、たとえば語彙的な語根（gusu「唐辛子」、biraN「ニラ」、akkoN「芋」、hataki「畑」など）と2拍以上の助詞（kara「～から」、Ngee「～へ」など）が、それぞれ独立した韻律語を形成する。
- 4) 本稿では「文節」を、語（複合語も含む）の単独言い切り形、または、それに1つ以上の助詞が後

続して形成される単位、と定義する。

- 5) ただしこの調査は、今後の調査の指針を得るための、あくまでも予備的なものであった。本来ならば複合語の調査は、前部要素、後部要素のそれぞれについて、その音節構造やモーラ数などの条件を揃えて行う必要があるが、この2014年の調査ではそのようなことは行っていない。たとえば前部要素だけについて言えば、(1)を見ると分かるように、b型に分類されている例の前部要素はすべて2モーラ語であるのに対して、c型のそれはすべて(重音節を内部に含む)3モーラ以上の語となっている。参照できる小浜方言の韻律型の所属語彙を記述したデータが(少なくともこの調査を行った時点では)存在しなかったために、このようなアンバランスが生じたのである。将来、韻律型別の語彙のデータが十分整った段階で、各要素の音節構造やモーラ数の条件を揃えた調査票を作成し、あらためて調査する必要があるだろう。
- 6) ただし一部のB系列の語が、(期待されるb型ではなく)c型の韻律型で出現するという現象が小浜方言には見られる。この点については、3.6.節で後述する。
- 7) この調査は、1992年3月と1999年6月に小浜島において行われた。いずれの調査も調査協力者(小浜方言の話者)はA氏(大正12年1月生まれ、男性)である。
- 8) これらのほかに、 +waNta 、 +wanta nu... (豚、豚が…)のような韻律型が観察されたが(これを本稿では「平進型」と呼んでいる)、この型については3.2.節で後述する。
- 9) 厳密には「文節」ではなく、「c型の核が指定された韻律語の内部」と記述しなければならない。しかし、ここでは仮にこのように記述しておく。松森(2015)によれば、小浜島のc型は1つ目の韻律語に昇り核がある。したがってc型は、語の単独言い切り形ではその語の最後の音節に、語に主格の助詞 nu を後続させた助詞付き接続形では当該の助詞 nu の部分に、ピッチの急激な上昇が出現することになる。
- 10) ただし第1モーラ目の母音が無声化する場合には、ピッチの上昇位置が1モーラ分、後ろにずれる傾向が見られた。 $\text{p}\text{u}[\text{tsi}, \text{p}\text{u}[\text{tsi} \text{nu...}$ (星、星が…)、 $\text{p}\text{a}[\text{na} \text{p}\text{a}[\text{na} \text{nu...}$ (鼻、鼻が…)、 $\text{p}\text{a}[\text{ku}, \text{p}\text{a}[\text{ku} \text{nu...}$ (箱、箱が…)、 $\text{k}\text{a}[\text{pi}, \text{k}\text{a}[\text{pi} \text{nu...}$ (紙、紙が…)、 $\text{f}\text{u}[\text{mo}, \text{f}\text{u}[\text{mo} \text{nu...}$ (雲、雲が…)、 $\text{k}\text{a}[\text{tsu}]/\text{k}\text{a}[\text{tsu}]: \text{nu...}$ (鯉、鯉が…)などの例がそれに当たる。
- 11) ただし、(注10に示したように)第1モーラ目の母音が無声化する場合には、 $\text{p}\text{a}[\text{na}$ (鼻) $\text{f}\text{u}[\text{mo}$ (雲)のように、ピッチの上昇位置が2モーラ目にずれる傾向がある。そのためピッチ下降も、第1モーラ目直後に実現しないことがある。
- 12) ただし $\text{paj}:\text{nu...}$ (葉が…)、 $\text{ka}]:\text{nu...}$ (井戸が…)など、1音節2モーラの名詞に1モーラの助詞が付いた場合には、(たとえ当該の文節全体の長さが3モーラ以上になったとしても)そのピッチの下降位置は、2モーラ目直後にずれていかない。そのためここでは「原則的に」としてある。
- 13) すなわちこの規則は、本稿の(3)に示した3種の型のうちのa型だけでなく、b型とc型にも適用することが期待される。
- 14) ただし $\text{u[sagi}, \text{u[sagi nu...}$ (兎、兎が…)、 $\text{u[jaNtcu}, \text{u[jaNtcu nu...}$ (鼠、鼠が…)のように、文節の第1モーラ目のピッチがやや低く実現することもあった。
- 15) ところが今年(2023年)に実施した2回の小浜方言の調査では、この平進型のほうが、上昇型よりもむしろ生産的な韻律型であることが判明した。この平進型は現在、小浜方言の韻律体系の中でもっとも生産的な韻律型となりつつあるようだ。この点については、第4節で後述する。
- 16) このようにc型の語に指定される核によるピッチの上昇位置は、音節を韻律単位として導き出される。これに対しb型のピッチの上昇位置の算出に関わる韻律単位については、それを検討するためのデータが現時点では不足している。しかし体系の観点から見て、おそらくc型同様、音節を韻律単位としているのではないかと考えられる。松森(2015:72-73)では、次のような例をb型の韻律型として挙げている。(ここでは単独でモーラを形成する子音 n を大文字の N に変更している。)

b型	$[\text{mu}]\text{ji}$	$\text{hata}[\text{ki}]$	Ngeedu...	「麦畑へぞ…」
	$[\text{ma}]\text{mi}$	$\text{hata}[\text{ki}]$	Ngeedu...	「豆畑へぞ…」
	$[\text{gu}]\text{ma}$	$\text{hata}[\text{ki}]$	Ngeedu...	「胡麻畑へぞ…」

宮古諸島の多くの方言の向格の助詞 Nkai や Nkee は、その先頭の N の部分が当該の助詞から切り離されて直前の名詞の後部と合体し、一つの韻律語を形成する。セリック・麻生(2023)は、小浜方言の向格の Ngee も、その先頭の N が直前の名詞と合体して一つの韻律語を形成すると論じた。もしそうだとすれば上述の例の文節全体の韻律構造は、次のように修正されなければならないだろう。

b型	$[\text{mu}]\text{ji}$	$\text{hata}[\text{kiN}]$	geedu...	「麦畑へぞ…」
----	------------------------	---------------------------	-------------------	---------

[ma]mi	hata[kiN]	geedu...	「豆畑へぞ…」
[gu]ma	hata[kiN]	geedu...	「胡麻畑へぞ…」

つまりこれらの文節では、その2つ目の韻律語（すなわちhatakiNの部分）の最後の音節が、重音節になっていることになる。このように考えるとこれらの例は、b型が2つ目の韻律語の最後の「音節」を上昇させていることを示す好例ということになる。

- 17) 今回のデータには、一例だけであるが、語頭に超重音節を持つ語があった。pe:]Nduru / pe:]Nduru [nu... (蟬、蟬が…) がそれだが、その場合もそのピッチの下降位置は、文節の2モーラ目以降にずれることはなかった。

- 18) 松森 (2015: 72-73) のデータから抜粋した次のc型の語からはじまる文節では、先頭の韻律語（複合語の前部要素）のうち、tama.na.a (キャベツ) だけが重音節で終わっている。

[c型]	sji. N. [zja]	hata.ki	kara. [du... (砂糖黍畑からゾ～)
	na.be.e. [ra]	hata.ki	kara. [du... (糸瓜畑からゾ～)
	tama. [na.a]	hata.ki	kara. [du... (キャベツ畑からゾ～)

この場合、tama. [na.a] hata.ki kara. [du (キャベツ畑からゾ～) のように、tama.na.aの最後の重音節全体が高いピッチで出現していることが注目される。これは、たとえば×tama.na. [a] hata.ki kara. [du... (キャベツ畑からゾ～) のように、当該の語の最後のモーラだけが高く実現しているわけではない。この点から見ても、上昇の位置を決める韻律単位は音節であると判断される。

- 19) A氏の発話データの中には、語末の2モーラにわたって高いピッチが実現している例もあった。a[maru (余り)、a[buru (扇)、mumuN[daru (腿)、ka]N[naru (雷)、pi]k[karu (光)、ka]puru (蝙蝠)、su]N[zuru (硯)、fu]t[ciuru (葉) などがそれに当たる。これらは最後の音節がruであるという共通点を持つ。これらの語例は、音韻的には (たとえば /amar/、/abur/ のように) 語末が子音 r で終わるもので、その最後の母音 u は (ピッチの上昇位置が決定した後に) 音声的規則によって挿入された一種の「挿入母音」である可能性がある。これに対し同じA氏のデータの中には、kuku[ru (心) fu]ku[ru (袋) ts]ipu[ru (頭) など、同じように最後の音節がruであるにもかかわらず、そのruの部分だけが上昇するような例も存在した。これらは音韻的にも、(たとえば /kukuru/、/fukuru/ のように) その語末音節に母音 /u/ が存在している語なのではないかと考えられる。

- 20) おそらくb型の語から開始する文節についても、同様なことが言えるのではないと思われる (このことは注16でも述べた)。(3) に示したように、小浜方言のb型から開始する文節は、その2つ目の韻律語の最後の音節が高くなることが予想される。したがって、もし2つ目の韻律語の最後の音節が重音節ならば、b型から開始する文節では、当該の重音節全体が高いピッチで実現することが予測される。しかしながら、それを確認できるデータは現在手元にない。これは、たとえばb型の前部要素を持ち、かつ後部要素が重音節で終わるような複合語の例を集め、それらを先頭に置いた文を発話してもらった韻律型を検討することによって、確認することができるだろう。A氏から得られたデータの中には、(おそらくb型の語根から開始する) 複合語だと思われる語 (u]ja[fa: 親子、pi]N]da[re: 鹽、ki]: [uru 胡瓜、など) も数語あった。しかし語例が少ないため、これだけで結論づけることはできない。したがって、これは今後の課題としなければならない。

- 21) なおA氏の発話では、語の単独言い切り形でも、たとえばpjo]:[tu (海豚)、taji]ku (太鼓)、su]N]zu[ru (硯)、ti]N]t[co: (天井)、ka]N]naru (雷)、mi]:[maNts]i (蚯蚓)、i]rak[kjo: (辣韭) など、比較的長い (モーラ数が3モーラ以上) の上昇型の語に、重起伏音調が観察されることがあった。

- 22) どのような条件のもとにこの(8)の規則が適用して、重起伏が発生しやすいついては、現時点では (検討できるデータが不足しているため) 断定はできない。ただし語の先頭の音節に無声化した母音が出現する場合 (たとえばpa]ra [nu... (柱が…)、sa]na [nu... (笠が…)、s]ini [nu... (脛が…)、ts]ipu[ru / ts]ipuru [nu... (頭、頭が…)、fu]t[ciuru ~ fu]t[ci]ru / fu]t[ciuru [nu... (葉、葉が…)、ka]puru / ka]puru [nu... (蝙蝠、蝙蝠が…)、fu]ku[ru / fu]kuru [nu... (袋、袋が…)、pi]k[karu / pi]k[karu [nu... (光、光が…)、ka]ta]na / ka]tana [nu... (刀、刀が…) など) には、(たとえ文節が3モーラ以上の長さであっても) 重起伏は生じにくいようだ。このような条件下では、(8)による文節の頭のH音調の出現は抑えられてしまうのではないかとと思われる。

- 23) これに対し本年 (2023年) に行った調査では、重起伏は観察されなかった。

- 24) (16) の具体例では、そのピッチ下降を語の2モーラ目直後付近に付しているが、その下降位置が確実に2モーラ目直後であるかどうかは不明である。これは、聴覚印象だけで判断することはできない。

- 25) ちなみに、これらの語のほとんどがA系列とB系列の候補語である。参考のために沖縄本島の金武

方言の同源語を挙げると、tui (鳥)、fusu (臍)、juda (枝)、kwa: (子供)、adza (黒子) (以上 a 型)、bi:ra: (葱・わけぎ)、ci: (乳房) (以上 b 型) となっている。金武方言の ku:ga (卵) と小浜方言の ko:ma (卵) を同源語と見てよいかどうかは、現時点では不明である。ちなみに金武方言の ku:ga は、c 型の語である (したがって C 系列の候補語である)。

- 26) ko: *funa[↓]bo:N (シーカーサー) の接頭辞 (?) ko: は、どのような意味・機能を持つものなのかについても、現時点では不明である。
- 27) 沖縄本島の金武方言には、これらと同源語と推定される語 (na:[ba きのこ、mi]migu[i きくらげ) が存在し、金武方言では両者とも c 型の韻律型を持つ。したがって (少なくとも金武方言のデータからは) この 2 つの語 (「茸」と「きくらげ」) は、C 系列の候補語となる。
- 28) 松森 (2015) では、次のように、biraN (蕈) と akkoN (芋) を a 型の韻律型として解釈した。これらの語は、その 2 モーラ目に下降が観察されたからである。
- [a 型] bira] N hataki Ngeedu 「蕈畑へぞ…」
ak]ko N hataki Ngeedu 「芋畑へぞ…」 (松森 2015: 72-73 から抜粋)
- しかしながらもしこの韻律型が、指小辞が添加することによってあらたに生じた特殊な韻律型 (本稿の「指小音調」) だとすれば、松森 (2015) はその解釈を誤ったことになる。このことの正否についての検討も、今後の課題としたい。
- 29) 北琉球の三型体系の代表とも言える沖縄本島の金武方言の語彙を参照すると、「土地」「竿」以外の語について、この (18) に挙げられた語の同源語と思われる語が見つかった。それらの韻律型は、ja:] (家)、u]ja:] (親)、he:] (南)、i:]ru:] (色)、ha:]na:] (花)、du:]ku:] (毒)、a:]tca:] (明日)、ku:]ci:] (櫛)、ka:]du:] (角)、nu:]tci:] (命)、kaga:]mi:] (鏡)、ka:]na:] (鉤)、ka:Nna:]mi:] (雷)、nabe:]ra:] (糸瓜) となっており、金武方言では、すべて b 型の韻律型で出現した。すなわち (18) に挙げられた語のほとんどが、(少なくとも北琉球のデータからは) B 系列の候補語となる。
- 30) ちなみに沖縄本島の金武方言のデータを参照すると、「糠、山、枕」は no:]ka:] (糠)、ja:]ma:] (山)、mak]kwa:] (枕) となっており、いずれも (金武方言における) b 型で出現するため、これらは B 系列の候補語となる。なお「戸」には金武方言では ha:]iri: という語が使用され、小浜方言の ja:Ndu とは同源語ではないと判断されるため、この小浜方言の ja:Ndu が B 系列かどうかは、今のところ不明である。
- 31) これらのデータには下降型 (例: ja]Ndu nu…) も上昇型 (例: jaNdu [nu…) も存在している。上昇型で出現するということは、それが c 型であることの実証になる。しかし下降型で出現するという事実からは、それが a 型と b 型のどちらであるかを即座に判断することはできない。これらが確かに b 型であるということは、後述する 2023 年の調査の話者 (本稿の B 氏) の韻律型を検討することによって、判断できる。これらは B 氏の発話では … 卜 ja:Ndu nu … (… 戸の…)、… 卜 nuka nu … (… 糠の…)、… 卜 jama nu … (… 山の…)、… 卜 makora nu … (… 枕の…) となっており、すべて平進型で出現する。B 氏の発話では a 型の語は下降型で、b 型の語は平進型で出現するため、(19) に挙げられた語が a 型でない (すなわち b 型の可能性がある) ことは、明白である。
- 32) ここで「ほぼすべて」としたのは、複合語の韻律型には、b 型と c 型の区別が依然として保たれている可能性があることを念頭においているからである。また、特定の 2 モーラ以上の助詞を後続させると、この 2 つの型の区別が明瞭に生じる可能性もある。しかし現時点では、それを検討できるだけの十分なデータが存在しないため、この点についての判断は、差し控えたい。
- 33) 「～の話」という語句は、その「～」の部分に入れる名詞を選ばない (すなわちあらゆる名詞に後続することができる) ので、便利である。このような要素を後続させて名詞の韻律型を調査するというアイデアは、セリック (2021) から得た。
- 34) このような方法で推定を行った結果、B 系列の候補語となる一部の語彙が (期待される b 型ではなく) a 型に所属していることが明らかになった。u:ru (瓜)、miNduN (女)、fa: (草)、aba (油)、misu (味噌) がそれに当たる。その理由は、現時点では不明である。なお B 氏からの情報によれば、「草」という語は、その大きさによって韻律型が異なるようだ。大きい草は (fa:] nu… (草) のように) 下降型で出現し、小さい草は (卜 faa nu… (草) のように) 平進型で出現する。
- 35) ただし 3. 6. 節で見たように、b 型が期待される語の一部は、c 型の示す韻律型で出現している。

参考文献

セリック, ケナン (2021) 「下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告」『言語記述論集』13

- セリック, ケナン・麻生玲子 (2023) 「八重山語小浜方言の3型のアクセント体系について」 令和5年度第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会 (6月10日) 国立国語研究所発表資料
- セリック, ケナン・麻生玲子・中澤光平 (2023) 「八重山祖語の系列再建に向けた小浜方言のAB/Cの所属資料」『アジア・アフリカ言語文化研究』106: 111-131.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島における3型アクセント体系の発見 —与那覇方言の場合—」『国立国語研究所論集』第6号: 67-92. 人間文化研究機構国立国語研究所
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセント規則を再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』第63号: 13-36.
- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系 —その韻律単位に関する考察—」『日本女子大学紀要 文学部』第64号: 55-92.